

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 27 年 7 月 30 日	
所属部局・職	霊長類研究所 生態保全分野・修士課程 1 年
氏名	武 真祈子

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
鹿児島県 屋久島
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
屋久島実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 27 年 5 月 23 日 ~ 平成 27 年 5 月 29 日 (7 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター、準教授、杉浦秀樹博士
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)

写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くて結構です。

日程

- 5/23(土) 屋久島到着。夕食後、自己紹介と班ごとの研究計画発表。
- 5/24(日) 予備調査。調査の方法の確認。
- 5/25(月) 調査 (サンプル収集、行動観察等)、サンプル処理、解析、発表準備
- 5/26(火) 同上
- 5/27(水) 同上
- 5/28(木) 班ごとの発表、打ち上げ
- 5/29(金) エクスカーション、解散

本実習の目的は、屋久島でのフィールドワークを通して、野生生物の生態・行動研究の基礎的手法を学ぶことであった。履修生は海外 (インド、マレーシア、ブラジル、タンザニア) から招かれた若手研究者が 8 名、京都大学の大学院生が 13 名であり、それに講師 13 名を加えた総勢 34 名での実習となった。公用語は英語である。計 21 名の履修生はサル班、シカ班、昆虫班、キノコ班の 4 つのチームに分かれ、チームごとに研究を行い、6 日目にその成果を発表した。

私は、サル班のメンバーとして参加した。サル班は、私の他に日本人学生 3 人、外国人研究者 2 人の計 6 名であり、高橋明子さん、鈴木崇文さん、西川真理さん、栗原洋介さんのご指導いただいた。研究目的は、「ヤマモモにとってサルは種子散布者なのか、種子破壊者なのか調べる」ことだったが、今回注目したのは、「オトナ (6 歳以上) とコドモ (5 歳以下) で、種子の破壊率に違いがあるか」ということである。この答えを探るため、サルの糞をサンプリングし、糞中の破壊された種子と破壊されていない種子の割合を調べた。また、その糞をした個体の年齢区分を推測するため、糞の直径も計測した (図 1)。さらに、サルはどのような形質のヤマモモを好むのか、という選好性も調べるために、糞

中に残ったヤマモモ種子と木から直接とったヤマモモ種子とで、形質の比較も行った(図2)。



図1. オトナとコドモの種子破壊率の比較

図2. 糞中種子と木からとった種子の形質比較

今回サル班で扱ったテーマは、サルの採食生態および植物との関係という点で私自身の修士のテーマと重なっており、調査手法やサンプル処理の仕方など全てが非常に勉強になった。例えば、樹上のサルが何を食べているかを観察するのはかなり難しいこと、まして「種子をのみこんでいるか、噛み砕いているか」などということは、糞分析など一歩踏み込んだ研究をしないと、確からしいことは言えないということがわかった。また、研究のすすめ方という面でも、学ぶことが多かった。今回、わたしたちは結果が出揃う前から多くの時間を議論に費やし、結果として発表の準備がぎりぎりになってしまった。どのような発表のストーリーにするかは、ひとまずデータをまとめ、全体の結果を俯瞰してから考えるべきだと実感した。英語でコミュニケーションをとりながらの発表準備はかなり骨が折れたが、この苦労が自分の力になることを確信できる実習内容であった。何度も悩み壁にぶつかる私たちを辛抱強く指導して下さった、高橋さんをはじめとする講師のみなさんに、深く感謝したい。

写真



林道に沿って歩き、サルを探す



サルの母親と赤ん坊。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



糞サンプルの採集。



ふるいを使って糞を洗う。



ロープを使った木登り講習。



調査後のアイスは最高！



楽しい打ち上げの様子。

6. その他 (特記事項など)

この実習は、PWSのサポートを受けて行われました。関係者の皆様に深く御礼申し上げます。ありがとうございました。